

こころやりの老

無量光の巻

前篇

大御親

後篇 (前巻無量光つゞき)

理事無碍

根底

統一擔保

歸趣

大御親

大御親は正しく存在する哉と心の聞き子は疑ふならん。宇宙は全體通じて佛教にて法身毘盧舍那如來と云ふ。これを大御親と名く。宇宙は地水火風空の物質と識大の心質と、物心二質も其の質は無碍の一體にて吾人は此の分を受けて身體と精神とに現はれて人をなす。宇宙が一體の大御親なる故に天地萬物も一切衆生も皆其子なり。宇宙全體の大御親に比較したならば數とも知れぬ地球の其亦地球の寄生物の如き人類さへ精神發達して大御親が秘せる地球自然界の事理を悟て種々の發明をなすに非ずや。況んや其の大本源なる大御親に於ける甚深不可思議の状態は人間の智識などにて測り得べきものにあらず。

人はいざ吾人は大宇宙には實に絶對的不可思議の大靈の存在を仰がざるを得ず。實に法身は無量壽にしてまた無限の大光明者と信せざるを得ず。また宇宙は是法身無量光にして其の不可思議なる吾人が肉眼に現せる自然界も日月星辰繋りて此宇宙は實に

無限にして邊際も分界もなきものなるを信す。肉眼に對する自然界既に廣大無邊なり況んや心眼の對象なる神靈界の微妙不可思議甚深の理に於ては如何とも稱すべからず

教祖が華嚴等に言を極め義を盡して説れし其佛境界の甚玄不可思議なる消息は吾人の如き淺劣の徒と雖も心靈的實驗に於て靈界の妙は實に言語の及ばざる處なるを識る。

況んや大聖人の神眼に經驗し給ふ處の宇宙心靈界の消息に於てをや。華嚴經の説の如き何ぞ夫れ荒誕無稽の説と云ふべけんや。吾人は此地球上の寄生物なる肉の身を以て

見ては微妙ならざれども内面に有せる靈性は是れ大法身無量光の分子として佛性の存在あり。之を開けば六合に亘り大宇宙と合一する性を有せり、以て佛説の眞理なるを

信じ而して其の靈界に逍遙するを以て人生最上の慰安とす。世の文運開け此の身に於てさへ地球上を數ヶ月にて一週するを得るにあらすや。當者は恣に世界を遊覽する

にあらすや。吾人苟くも靈界に心を用るもの心靈を欲しきがまゝに十方の清淨國土に逍遙せしめ無數の大聖人と手を携へて樂を願ふことなきことを得んや、是大御親の

賜として感謝せざるを得ぬ以所である。

大御親は絶對無限無始無終永恒本然にして精神とも物質とも分つべき能はず。宇宙大心靈即ち法身無限光と名く。宇宙は一大靈態であるから人間に比して智慧と意志の

如きなるべからず。之は一切所に満てる大心靈の智と意志なればこれを一切智とも一切能とも名くべし。一切智と云ふも人類の智の如き分別思慮の智とは云へない。人

間から云へば自然界中に存在して實に完全なる理性の如くに認めらるるを智と名けたるのみ、即ち天地萬物の中に整然たる條理あり。秩序あるは事實なり。天則に行はる

る萬物中に一切の理性存すと云ふも不可ならざるべし。また萬物の生活し運動する勢力あるは大宇宙内の意力の存在と云ふも然らん。

此の法身本有の無限光は絶對なれども親子の區別と關係とを説明せんには宇宙間の本源と萬物とありて先ず三性に分ちて親子の因縁を示さん。三性とは如來性世界性衆

生性なり。如來性とは又神性とも云ふべし。即ち宇宙の本體一大心靈態法身毘盧舍那絶對無限にして萬物何れの物も對比すべきにあらず。また法身如來は因縁に規定せらるるもの

にあらず相對に約束せらるゝものは成すればまた壞し生ずればまた死し生滅變化極りなし、絕對は本然永恒の存在にして他に規定せられず本然自爾の體なれば生滅變化なし。之を如來性と云ひ一切萬法の所依とする處なり。これを圓成實性とも云ふ。圓は圓滿絕對無限の義成は本然自成にして因果的に成するものにあらず。實は眞實本有の靈性なれば即ち圓成實性と名く。是即ち萬物の大御親にして吾人はこれを法身無量壽如來と號す。

世界性とは十方三世の形式因縁因果的に成する處の性にして因縁和合性とも云ふ。世界一切萬物は因縁の相互の約束によりて成りまた種子より萌發し實を結びて又種となる如く因には果あり果には又因あり。是の如く萬物此關係によりて行はるゝを世界因縁性と云ふ。

如來性は絕對無約束、世界性は相對相互の因縁の約束によりて成る。そこで其の關係は世界因縁性の萬物も其の所依の根據がなくてはならぬ其の根據は何を以て爲すとならば即ち如來藏性であり絕對實性である。

宇宙の大靈が自己絶對なるものいかにして因縁性の世界性現はれたのであるか。大靈自體は絶對なれども大靈に常恒不斷の活動力あり。即ち一切智能の働きによりて現はれたる一面が相對の因縁の世界性なり。大靈自己は絶對なれども現象は相對なり。大靈自己中の相對現象が世界なり。

絶對と相對の世界とは一體の本體と現象なり。絶對の一切智一切能世界萬物中に内存して内而より云へば一切智にして智の秩序はこれを外より見れば因果的に出產せられ一切能の働動力は世界の生産活動の動力となりて現はる。世界萬物は無明の盲動的に生産するものにあらずして整然たる秩序即ち内外面の因果律ありて動じ有機物となる。

次に衆生性とは世界性因縁因果の關係により産出されたる一切の有機物に通じても種々無量雑多の種類に分れたれども同じく因縁因果の律によりて生成せるものなり。佛敎に因果無人とも云ふ。蓋し人和なるものも因縁和合の上に成立したるものにしてその因縁和合を離れて見れば本の元素のみにては人間にあらずと云ふこと一切有機物

に通じて同理なり。元素の種々の因縁和合の上に動植物も成立す。故に一切衆生は因縁所生法なり然らば人間も因縁因果の法より造れしものなり。因縁の關係は實に複雑なり。因縁關係は種々に形相を變化したる因果の關聯にて遺傳す之を衆生性と爲す。然らば人類の如きも因縁律を離れては生成せず。故に世界の産物因縁の所生なり。又世界性因果は理法の親なり。然るに其の因縁なるものも本絶對大切を體とするが故に衆生の本源には絶對の大靈を父とす。又根底の靈性より云へば大靈の分れなるも現在より云へば世界因縁所生の子なり。故に大靈の孫なり。靈性は大靈の分れれば子としての資格を失はず。

衆生は大靈に稟けたる靈性は伏能として存じ世界性所産の肉體の分は先に發達した大靈の分れとし大靈の智と能の分れなる衆生の精神發達の順序は意志の運動生理的に動く方が先に發達し智の分なる精神の智力等は後に發達す。

一切衆生は本來如來性を本として世界因縁因果の複雜維りなき雑多の性を受けて人性をなすも靈性は伏能として形體の方面先に發達す。

大靈大御親は絶對なれば本一體なれども其の常恒働動のはたらきに於て一方には一切智と一切能のはたらきによりて産出する方面の世界にして即ち萬物因縁因果の關係に成立す。其の因縁の所生なる衆生性は因縁自然の律によりて初めに極小より漸次進化して衆生性を圓滿に發達せしむ。次は地上の生物界一體に通じても原始の極小なる生物より因縁の關係上次第に進化して遂に人類となるに至る。又個體としても然り人類にても初胎兒が精虫の極小より養はれて圓滿なる人體となるに至る。

大御親は斯の如く一方に向つて一切智能に依つて世界に生産したる衆生界を極小より進化せし如く圓滿なる人格とす若し生物を産出し進化したるは終局目的ありとせばいかにして大御親は圓滿なる自性中に衆生を攝取し給ふか。

大御親は右の手より相待の世界に向つて時たる衆生を漸次に向上せしめて終に左の手を以て高等なる靈界に攝取し給ふ如くに觀せらる。高等なる宗教の示す所は如來の絶對なる常恒不變の靈界に歸趣するを目的とすればなり。佛敎の敎ゆる所は衆生の靈

性を開發し煩惱を解脱し圓滿なる靈體に體達するを期す。

八

終局目的に攝取せらるゝ法則。

大御親は直接に衆生を産出せしに非して世界性を發展し世界性の因縁の法を以て衆生を生ぜし如くに絶對の大靈は直接に衆生を攝取同化するにあらずして因果律理法を以て衆生成佛の階梯を立てしむ。因縁に約束せられし衆生は因果的に約束を解くにあらざれば理に協はずとし大御親は因果の法に順つて世界に出現して衆生救度の道を示す。報身佛即ち是なり。

能攝の報應佛と所化の衆生界とは同じく因果の法によりて顯るゝも其の性質に於ては相同じからず。衆生は一切能と云ふ意力の方により一切智は有れども所生の衆生には意志の方が先に發達し即ち人生の眞理を悟り能はぬ生理の方のみが發達して居る衆生がある。如來の右の手より再出されたる子である。

報應二佛は左の方より一切慧の光明方面より因果法を示して衆生を攝取して靈界に歸らしむる爲に顯れたり。衆生を離れたる大御親は本絶對的一體なれども左右の働きを分けて三身の説を以て大御親の働きを説明せば。一、法身。二、報身。三、應身。絶對獨尊の大御親が方面を分て顯れたる身とす。

法身大御親は自然界に向ひ因縁性の世界に向つて萬物を開展し生産するは天則秩序を以て萬物を律するの身なれば法身と云ふ。法身としては天地萬物の理法を爲さしめて衆生の身心四支五官よりすべての生理の法を具へてまた萬物に法則ありて行はれしめ因縁の世界には終局の目的に靈界に攝取する理法あるが如くに法身は衆生界を進ましむ。また生物は進化の終局は靈的生活に入て靈界に歸ることを得らる伏能具備せしむる如くに觀せらる。天地萬物の備を以て衆生を極樂に向はせしむるは法身の性なり。

次に報應二身は衆生を終局に攝取せんとすの御親の慈悲と靈力の現はれたるを信す。報身としては因に法藏の大願を示し果に十劫正覺の報を現し因果の世界に顯れし如來なり。また衆生が如來に歸命信賴すれば其の心に報ひて顯れまた攝取同化の徳を施す

九

報佛は天に在りて衆生に儼臨し太陽の照すが如く。應身は地上に出で、報佛の光明を仰がしむ。一方は天の淨界に在りて衆生を照し應佛は地上にありて衆生に教へて如來に歸せしむ。之を釋迦此方發遣と云ひまた彌陀即彼國來迎と云ふ。彼は天佛として衆生に照臨し此は人佛として懇るに教へて歸せしむ。斯く二身に分れたれども同一の大御親なり。

一〇

理事無礙

絶對阿彌を離れたる一切處なしとせば顯動世界とは如何に分別すべき。

顯動世界即ち天則秩序に現れたる世界と本體は同一の本體と現象との兩方面なれば現象界の本質即ち絶對阿彌の本質なることは論を俟たず。

然れども現象界即阿彌と認むべからず。顯動界は阿彌の本質の一切能に展發せられたる自然界にして物心二質の現象なり。本質は絶對精神態にして現象に非ず。然れども本質を離れたる現象界にあらざれば現象の實體なり無礙なり。一切處として阿彌の精神態ならざる處なき故に一切衆生の心象即阿彌の中に顯現す。さればとて是天然の方面の現象は阿彌の實現といふべからず。而して心機開展して阿彌の内容は即ち世界内容として無礙の個人現は是阿彌の個人實現とすべし。故に本質絶對の故に過去際より未來際に已に一切の心物二觀は悉く一時念に阿彌の中の現象ならざるはなし。故に

一一

無智 自然にして智に外ならず。

根 底

世界の一切衆生は相待因果の規定により所謂因果所成法にして 中論に所謂因縁所成の法にて 即ち假にして 種々の衆質互に資縁となり元因となりまた助成規定と成て成ずる所の十界三千の性相悉く七大互に素因と成り助成と成りて規定せるこの相待規定するものは偶然に相寄りて成るべきものに非ずして 若しは心質若しは物質依正色心即ち心身土は悉く相待規定ならざるものなし。是の如き相待規定の類は偶然に非ず軌持の統一秩序を有して個々自己より生したるに非ずして高等なる根底によりて成立せるものなりとす。

密師の原人論に萬靈蠢々皆其本あり。萬物各々其根に歸す。未だ根本なくして枝末あるものあらず。是三才の中の靈本源ならずやと。自ら自己の從來する所歸趣する處を知らざるべからず。

古來世界及び衆生の本源を設定するに淺深の等級甚だ多し。

今其根底を説くものを最も淺劣なる天然教より最高等意識に發達したるまでを暫く三等に分つ。

初に天然教 超天然教 圓具教。天然教とは至て幼稚なる宗教意識にして純朴なる天然の人には其本體は神を自然現象界にまたは天然の物質と一なりとして其深奥の理を省察せず。故に彼らの世界觀に於ても天然の現象を超越する能はず。故に世界及人生も天然にして原人に所謂人性の本源を儒教を習ふ者は祇知近くは則乃父の祖體を傳て相續して此身を受得たりと。遠くは即ち混沌一氣別れて陰陽の二と爲り二天地人の三を生ず。三萬物を生ず。萬物と人と皆氣を本とす。

虛無大道は生成發育すと。曰く道法自然の元氣を生し元氣天地を生し天地萬物を生す。故に愚智貴賤貧富苦樂皆天に稟く 時命に由る。彼ら身の元由を究めず所説萬物

一三

象外を論ぜず 大道を本と爲と雖ども順逆現滅染淨の因縁を明さす。

日本の神道の如き造化の三神を立つるも天然教たることは論ずるに及ばず。天然多神教天然一本教に於ても皆天然より萬物發生すと。スピノーザの哲學今日の自然科学の唯物論者の如く機械的世界觀は此自然現象を根底とす。

古代幼稚の意識は勿論なるも文化發達したる時代には物的機械的のみ發達したるも超自然の内容の觀念發達するに非ざれば意識すること能はず。

次に佛教に華嚴には五教に分つ。

初人天教には三世業報善惡因果三善道三惡道の苦樂の報命を感ずるは其根元は業即ち羯磨に因る。然るに業に三種あり 善惡不動に三界の苦樂の報を稟く。若し業なき時は報の行べき元因なし 故に業動を本とす。

小乘には身心共に無始より已來因縁力の故に生滅し相續窮りなし身心假合して一に似たり常に似たり。凡愚せず執して我とす。我によつて貪瞋痴三毒を現す。身口に動じて一切の業を造る。業は免れがたし。故に五道苦樂の身と三界勝劣等處所受の身還つて執して我と爲し還た業を現し報を受け身は則生老病死死して復生す。界は成住壞空則空而復成す。小乘また惑業を生死及世界の根本とす。

大乘法相家説 一切衆生無始已來法爾として八識あり第八賴耶識是其根元。頓に根身器界種子を變じ轉じて七識を生ず 皆變て自らの所縁を變現して却て實法とす。如何變するや。我法分別薰習力故に諸識生時變して我法に似たり。第六七識無明覆る故に此を縁じて執して實我實法と爲し重病を患ひ異の色人物を見る如し。忠力の教に實に人ありと謂ふ我身も唯識所變なり。識を身の本と爲す。

破相教 一切因縁より生ぜざるなし。是故に一切法空ならざるなし。因縁所生の法我説即是空。信論に一切諸法唯妄念によつて而も差別あり若し心念を誰れは即ち一切境界の相なし。空を以て世界及び身の本と爲す。

一乘顯性教

一四

一切有情皆本覺真心あり無始已來常住清淨にして昭々として味まらず々として常に知る亦佛性と名づく亦如來藏性と名づく。無始より妄相之に翳して自ら覺知せず但凡質を認め故に耽著して業を結び生死の苦を受く。靈覺真心清淨にして全く諸佛と同じきを開覺す。華嚴に曰く佛子一衆生として具に如是知慧有らざるなし。俱妄想執着を以て自ら證得せず。若し妄想を離れば一切智自然智無礙智即ち現前を得。

圓 具 教

世界相待規定は自ら立ものに非ずして必ず高等なる根底なる絶對にして無規定によつて成立することを得。

絶對にして無規定なる實體之を阿彌の法身如來藏性と名づく。世界衆生及一切諸佛の根底なり。法身なる規律統一の秩序より世界及び十方諸佛賢聖悉くこの法身如來藏より生ずる故に 楞伽に十方國土衆生及十方一切法報應化身等皆阿彌陀より出とは是なり。一切最終の根底は即ち阿彌の法身とす。華嚴の本覺即是と同じ。

統 一 擔 保

世界の原始の根底は世界其ものを以て體根底とする宗教意識は幼稚なる宗教意識にして 最高等に進化して 世界及衆生の身心土の根底は阿彌の法身たることを知る。

次にこの世界衆生即ち宗教主體を統一し擔保する本質性能は いかなる者とならば實體根底と同じく 天然教は世界物素已上の客體あるを意識せざる故に 此世界の一切衆生を統一し保存する勢力は天然物質にある勢力にしてそれ已上にかはる本質能力あることをも意識せず。

法身の軌持する 統一秩序を有し 高等なる實體によつて統一し擔保せらるゝものにして 相待規定の依他起性のみにて何に依て擔保せられん。之を統一し擔保するものは即ち絶對の實體によらざるべからず。天然の相待規定已上の統一せる絶對によつて解脱の理性あることを得べし。

儒教の大極乾坤陰陽此世界を統一し擔保せるもの天地自然を命に自然力による。また道教の自然道法自然に保存せらるゝ。

天然一體教の如き 自然科学の勢力太陽エネルギーによつて保存活動とする如きは天然の幼稚たる意識なり。天然機械盲目的規律によつて保存せられ統一せらるるとす。彼らは自然界は超天然の高等なる實體の爲に統攝し擔保せらるゝことを識らず。

佛教の人天教には一切衆生は悉く業力に保存せらるゝと個人の本あるを議證せず。小乗教は衆生の感業力によつて衆生及世界は保存せらるゝものと感業盡さる限りは保存す 世界は一切衆生の同業力の所感なれば衆生の感業力盡る時は世界も保存すべきに非ず。大乘法相教には衆生及世界は悉く阿賴耶識によつて統一し保存せらるる唯識の所變。迷唯識の轉依せるより世界及個人保存せらるゝものとす。

破相教には世界所成の法の存在するは因縁所成。唯妄念に依て差別し保存せる。妄念を離れば世界及衆生あるなし。

華嚴教には唯一眞靈性不生不滅不易不變。眞性に無限と無壞と無雜との義あり。この絶對無限の眞性は世界とは區別あり。圓融無碍にして本質なり。現象にあらずしてまた本質は現象世界の衆生を現出擔保する本體にて即ち絶對眞心態なり。此絶對無限の眞性に無限の屬性即ち妙用あつてこれを保存す。而して世界を斷盡するにあざれば本質顯現せざるにあらず。本質と世界は實體と現象となり。然れども世界即ち本質にあらず。斯の如くならば天然教と同じ。

圓 具 教

世界及一切衆生の相待因果は是に超然たる高等の絶對無規定の實體ありて之を統一し擔保す。然れどもこの世界相待を超越するといふも世界斷盡して初めて本質なるといふに非ず。この相待世界は絶對の本質に統一し擔保せられて本體と理性とは無碍にしてまた本體は世界一切を統一し 擔保するのみに非ず。本質内容は豊饒にして無邊の性徳を具存し 世界萬類は之の本體の勢力に發展せられて發生するのみに非ず之

に統攝せらる。本體内容は豊饒の故に種々の方面に發展し之に勢力を興へ。また種々無邊の性徳具存して種々の方面に開展し。活動するのみに非ず。内容に常寂光土蓮華藏世界極樂世界等の又衆生に對しては法報應の變化身等を顯現して衆生を世界態より歸趣せしむるは最終局目的の理性なり。

華嚴に一切本來具に如來智慧を具す。衆生迷惑して見ず。我當に聖道を以て永く妄想を離れ自身中に如來廣大知慧佛と異なるなきを見せしめ。方に本來是佛なる故に行は佛行心は佛心に契ひ本に返し源に還る無爲自然に至る。應用恒沙。之を名て佛と曰ふ。一真心體顯れば一切虚妄を悟る。眞を悟るの智を以て斷惡修善。妄を息め眞に歸す。妄盡眞圓なるを是を法身佛と名くべし。應理無窮を化身佛と名づく。

圓 具

世界及び一切衆生は表面は個々各別の如くなるも最深の内面不可割的に統一なる最終局目的歸趣の理性あり。之の本來理性あるを意識せざる故に主我を執して迷惑して本眞に歸すること能はざるを凡夫の迷没とす。人佛知見啓示によりて絶對眞心を知見し歸命融合によりて大我と致一し猶進んでは阿彌の目的に協力して終局に歸趣す。

已に更生の時は天然の意志を轉じて眞我の中に歸入す。是よりは表面は個人的なるも内面は阿彌と致一す。之を理想的に歸趣したるを有餘の大涅槃にして。正しく肉身を轉する時を無餘涅槃とす。無餘といふも小乗の如く偏眞に歸するに非ず。唯絶對阿彌の本體に歸趣するにあれば即ち清淨法身なり。

また圓滿報身とも三身圓に證すとも。

内容には永恒實存三身本體にして應化無礙に迹門の三身を示現して盡未來常恒に衆生を度す。内面には常恒大涅槃不生不滅。應用無窮には三身を發現す。之を歸趣とす。

歸 趣

客體阿彌は世界一切主體に對して統一擔保の性能より進んで最終の目的として衆生

に對する勢力は歸趣の理性とす。

表面なる世界過程の中には唯物的現定のみ流行するに非ずして。動力的理想的の存在するは已に多くの理想家の認可せる處ならん。天然の人は。個人目的の外に絶對眞理目的なる理性あることを識らず。不識の中に個人の目的を立つ。本來この個人目的發開して觀する時絶對目的理性に至るべきものなるも。天然の人は自ら之を識らず。若人にして個人の目的を以て最終の歸趣とせば。實に哀むべきものなり。人は自己本來絶對の本體の自己なることを開發して始めて眞理の理性に契ふたるとすれば絶對目的として歸趣すべきものなり。

天然教の萬物芸々たる其根に歸す。

儒教の人皆天に稟時命に由る故に死後却て天地に歸す。

道教の自然に歸すと何れも歸趣する處自然界を出でず。

唯物論者及自然科学の歸趣する處は自然界を出でざるは論を俟たず。婆羅門教は宇宙現象界は幻夢の如く眞實に非ず。客體婆羅門は眞實清淨なり無限なり。この婆羅門に歸趣するを目的とす。

佛教小乗教人天教は善惡不動の業に依て六道生死を享く。業盡る時は生死の苦なし小乗佛教五陰無我の觀智を修して貪瞋等を斷じ諸の業を止息し。我空眞如を證得し乃至羅漢果を得。灰身滅智方に諸苦斷ず。之を終局とす。

法和教衆生五種各別の種性ありて無性有情は永く成佛せず。聲聞定性は眞實涅槃を歸趣とす。緣覺も同じ菩薩種性は漸次に眞如を證して終に精神は轉依して四智となり三身圓に證す。